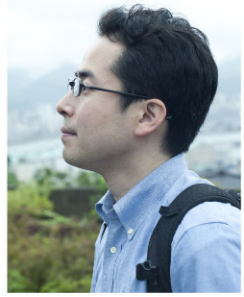
現場に飛び出せ！
躍動する
フィールドワーカーたち

最終回



渡辺 貴史
Watanabe Takashi

水産・環境科学総合研究科
准教授

1973年東京都江戸川区生まれ。2004年筑波大学大学院社会工学研究科都市・環境システム専攻修了。日本学術振興会特別研究員（国立環境研究所生物多様性研究プロジェクト）、高松工業高等専門学校（現香川高等専門学校）建設環境工学科助手などを経て2007年より現職。博士（社会工学）。

「農」が息づく都市へ

望ましい街並みとは？評価と現実の食い違い

まず、下の写真をご覧ください。これは、東京郊外のとある街並みです。何の変哲もないようにみえるこの街並み。私が専攻する都市計画では、長い間、望ましくない街並みと考えられてきました。『良くない』と評価されてきた大きな理由は、マンションや戸建て住宅の間に農地があることです。農地が『良くない』と評価されるのは、写真の地域が十年以内に市街化を完了することを原則とする区域（市街化区域）に入っているにも関わらず、現在も、建物などに変わらずに残っているからです。

しかし、こうした街並みは、郊外ではよく見られるものです。そして街をよく観察すると、後に説明する農地やそこでの活動などの「農」が住みよい街の形成に役立っていると思われる場面に直面しました。

都市と「農」のことをいろいろと見聞きするうちに、私は、ある問い――なぜ都市に「農」が必要なのか――に関わる研究を行いたいと思うようになりました。

ある都市計画の著名な先生は「研究の成否は、靴底をどれだけすり減らしたかにかかっている」といわれていたそうです。つまり、良い研究を行うには、ドラマで捜査を進めている刑事のように、場所の丁寧な観察と様々な人からの聴き取りから、手掛かり――研究の仮説をみつけることが重要だということです。

こうしたことを心がけながら、私は、大都市や地方都市に息づく「農」を対象としたフィールドワークに取り組み、現在に至っています。

仮設検証。なぜ都市に「農」が必要なのか

この研究において私は、文献や地図を読み取って都市と「農」が適度に混じる地域を選び出し、そこを徒歩や大学から持参してきたミニサイクルを使って駆けずり回り、観察や聴き取りなどを通して、なぜ都市に「農」が必要なのかとの問いに応えられる研究の仮説を見つけることから始めました。

まず設定した仮説は、「農地は、住みよい環境に役立っているのではないか」です。実際に、市街地に隣接する農地は、一時避難場所や緊急時に食料を提供する空間と地域内で考えられており、首都圏の多くの地方自治体では、農家と協定を結んでいることが分かりました。また、これらの農地のなかには、市街地に不足する広がりや緑を提供することで、都市の心地よさを高めている空間があることも分かりました。

次に設定した仮説は、「農家は、住みよい環境づくりに関わっているのではないか」です。例えば、農家が農地内や住まいの庭先で行っている農作物の直接販売（直販）が挙げられます。直販は、都市住民に安全・安心で新鮮な農作物を提供しており、住みよい環境づくりに役立っていると考えられます。農家による住みよい環境づくりへの関わりは、直販だけではありません。学校給食への食材提供や児童の農作業体験の受け入れなど、様々な関わりがあることが聴き取りやアンケートから明らかとなりました。

そして今後検証を考えている仮説は、「都市住民は、農業に深く関わり始めているのではないか」です。特に最近、郊外では、農家の農作業や農作物の販売に携わる都市住民が現れ始めています。この仮説はこれからの都市の「農」の継続を考えるにあたり大切な課題だといえるでしょう。

このようなフィールドワークによる仮説の発見と検証は、都市に「農」が根付いていることを示してくれたといえそうです。

「農」に回帰する都市そして長崎でも…

「農」は、近年、大都市や地方都市で新たに出現しています。こうした「農」の状況は、学生との共同研究や出張の合間に行う現地調査によって、少しずつ把握しているところです。

大都市に出現している「農」には、二つのタイプが見られました。ひとつは、企業の建物内や外部空間に出現しているものです。たとえば建物内に農作物を栽培できる環境を整えている企業が現れています。その企業は、生産された農作物を社員食堂で消費することで、食料の建物内自給を心掛けていました。また、屋上緑化の空間の一部を菜園に活用しているビルもあり、近隣住民に開放されています。もうひとつは、人口減少によって廃校となった学校跡地から発生しているものです。それらは、小学校の農業体験施設や区民向けの市民農園として使われていました。

「農」の出現は、大都市以外にも、地方都市の一つである長崎市でも見られました。具体的には、斜面市街地や計画的に開発された大規模な住宅地内に菜園利用されている土地がありました。

これらのことから、まだ不十分ですが、都市が「農」に回帰しつつある状況が見えてきました。

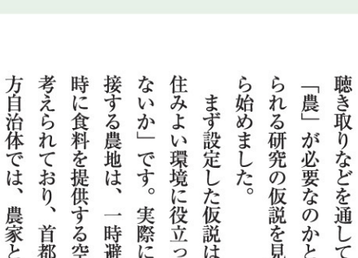
都市の処方箋のためのフィールドワーク

私は、フィールドワークは、医療の診察に当たるものだと考えています。医療では、どんな病気でも、診察し症状を知ってから、処方箋を立てるでしょう。都市計画も同じです。処方箋（例えば道路の整備など）を考えるためには、まず患者（都市）を診察（フィールドワーク）し、症状（解決が必要とされる課題）を知ることが欠かせません。

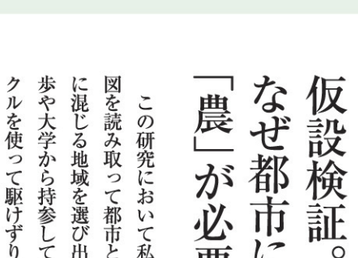
都市に「農」が根付いていることを検証したフィールドワークは、過去の診察による処方箋（市街化をすすめる区域には、「農」を残さない）の効果を確認する経過診察に当たるものであり、都市が「農」に回帰しつつあることを発見したフィールドワークは、処方箋を必要とする新たな症状（「農」への回帰の対応）が現れていないかを探る定期診察に当たるものだといえるでしょう。

これら都市の「農」に関わる処方箋を提案するために、私は、引き続き都市の「農」を対象とした診察――フィールドワークを続けていくつもりです。

オフィスビル内の水田
パソナ本部ビル（東京都中央区）内の入口に設置された水田（16.5m×5.4m）、メタルハイドロランプ等を用いた促成栽培により、年3回、収穫できる。



直販スタンド
東京都の農家の半数近くは、農作物を、直販所、家の庭先、農地内で直接販売（直販）している。（東京都国分寺市）



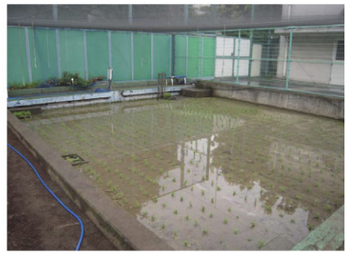
災害時に協力する協定を結んだ農地
農地のなかには、自治体と協定を結び、地震発生直後や地区防災センターに避難する時に、緊急避難場所として、地域に開放しているものがある。（東京都国分寺市）

屋上庭園内の菜園
三井住友海上駿河台ビル（東京都千代田区）では、屋上庭園の一部を菜園として、近隣住民に開放している。菜園の廃棄物は、堆肥に変換され、菜園で使われている。

壁面緑化が施されたオフィスビル
パソナ本部ビル（東京都中央区）には、エネルギー消費を減らし、道行く人の目を楽しませるために、フジ・バラ・果樹などを用いた壁面緑化が施されている。

市街地に不足する広がりを提供する農地
高密度な市街地内にある農地は、広がりある空間を提供することによって、居住環境の改善に大きな役割を果たしている。（埼玉県越谷市）

長崎市の高台の住宅地にある農地を調査
土地利用の現在の使われ方を知るためには、現地での観察が欠かせない。
現地で観察した結果は、画板に止められた地図に記録される。



廃校のプールを用いた水田
廃校した小学校を用いた多目的施設、十思ガーデン（東京都中央区）のプールは、小学校向けの農業体験施設となっている。児童達は、夏休みも交代で管理している。

廃校の校庭を用いた菜園
東京都渋谷区が、平成20年5月に小学校（渋谷小学校）跡地を用いて開設した美竹区民菜園。平成23年度の募集倍率の平均は、6.8倍であり、高い人気を誇る。